

付が認められる。75は74より低く厚みのある高台を持ち、底部は緩やかな曲線を描きながら上部へ移行する。胴部外面に青緑色の染付が見られる。見込みには重焼きの痕が残る。全体にやや濁った灰色を呈する。二点とも産地、時期は不明。76は関西系の灯明皿。高台は短く、底部は大きく開きながら上部へ移行し、口縁部間際で立ち上がる。全体にやや濁った感じの透明釉がかかり、釉面には細かい貫入がみられる。見込みには重ね焼きの痕が残っている。一八世紀～幕末。77は染付皿。内・外面全体に染付文様が施されており、底面には青緑色の釉で「□六十六」と書かれている。焼継ぎの存在と併せて、その請負番号であろう。時期と産地は不明。78は瀬戸美濃かと思われる。赤色と青緑色の釉により松と梅らしき絵柄と連弁が描かれている。幕末～明治。

瓦（第19図79～82）

軒丸瓦（79）、丸瓦（80・81）、平瓦（82）がある。

79は瓦当を僅かに残す。周縁は直立縁で、内区の文様より高い。圈線がなく、周縁からすぐに連珠文になる。巴の頭は丸く、尾は長く、その先は次の巴の頭についている。81は全体の長さがわかるが、82は胴部の大半を欠損している。凸面にはケズリ痕が微かに残り、凹面には布目が顕著に残る。高さや厚みはほぼ同じであるが、81の玉縁がやや短い。82は欠損部分が多く、元の大きさは分からないが、あまり反りは大きくないようである。凹面にケズリの痕が微かに残る。紐孔が穿たれている。

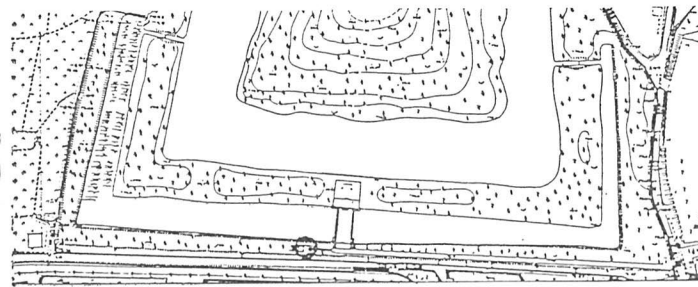
その他（第18図83）

平面形が楕円形の薄い木製品。周縁部が細く、中央がやや厚い。随所に焦げた痕が残る。
（佐藤利秀）

平城坂上陵見張所改築区域の調査

仁徳天皇皇后磐之媛命平城坂上陵は奈良盆地の北端に立地する前方後円墳である。今回の調査は外堤上に位置する見張所が改築されることとなり、その基礎部分及び汚水枡設置部分の掘削に立ち合った。

掘削区は旧見張所を撤去した跡地である（第20図）。調査区域は見張所基礎部分（四メートル×三メートル）を幅一メートル、深さ〇・八メートル程度を掘削したほか、汚水枡設置部分（三メートル×二メートル）を深さ一・六メートル程度を掘削した（第21図）。さらに外堤外側法面にマンホール設置箇所（一メートル×一メートル、深さ〇・八メートル）二箇所、電気引込栓設置箇所（一・二メートル×一・二メートル、深さ一メートル）一箇所を掘削した。掘削区の層序は大きく四層に大別できる（第22図）。Ⅰ層は表土であり、参道に敷き詰められた小礫を多量に含む土層である。Ⅱ層は暗茶褐色の砂質土であり、旧見張所の基礎に用いられた拳大のバラスを含む。この層より遺物の大半が出土している。Ⅲ層は茶褐色の砂質土であり、堅く締った土層である。この層からは遺物は全く出土しておらず、外堤を構築した際の盛土であるか、地山であるかの判断は難しい。Ⅳ層は表土から約一メートル下の粘質土であり、



第20図 平城坂上陵調査箇所的位置 (1/4000)

極めて均質の土層であるため地山と考えてよい。これらの土層のうち、Ⅱ層から埴輪底部が多量に出土していることより、本来埴輪が外堤上に樹立されていた可能性が高いものと考えられる。しかしながら旧見張所の建設の際に攪乱され、原位置を保って出土したものはいなかった。

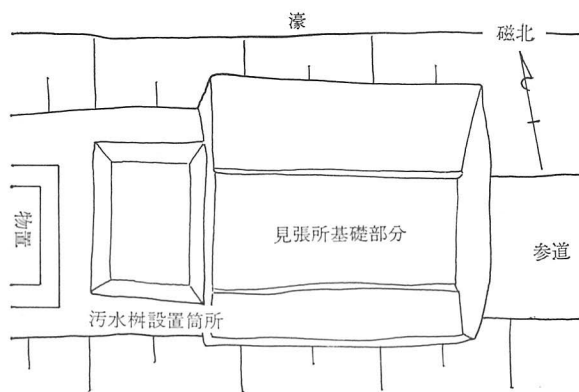
次に出土遺物は総数二〇八点である。このうち一点のみが須恵器片であるが、ほかはすべて埴輪片である。なお、この須恵器片は小破片であり、器種、所属時期は不明である。出土した位置は一点のみが外堤の法面の掘削箇所から出土しているが、他はⅡ層からの出土品である。

出土した埴輪の特徴としては、外面の色調に明褐色を呈するものと淡黄灰色を示すものがあるが、黒斑の付着した個体は一点も認められない。焼成はいずれも埴質であり須恵質、半須恵質といえる個体はないものの、黒斑がないことから窖窯で焼成されたものと考えられる。

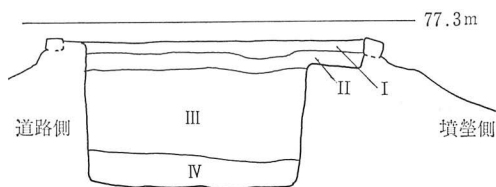
種類については円筒埴輪しか確認できず、明らかに形象埴輪と思われる個体は出土していない。その他、口縁の

破片は出土しておらず、またスカシ孔の形状、大きさが判明する個体も出土していない。

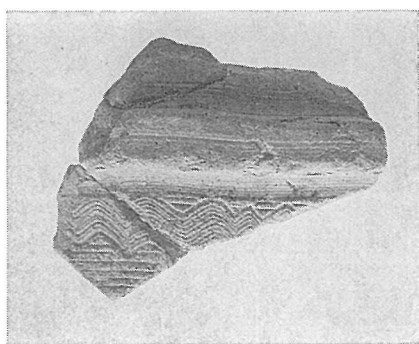
外面の調整は二段目以上は基本的にヨコハケ調整が施されている。ただ、第24図4に示した個体には波状の調整（文様？）が施されている。この波状文は須恵器に認められるものに極めて類似しており、須恵器製作との密接な関係が窺える（第23図）。内面の調整は基本的にナデ調整であるが、第24図1に示した個体には内外面ともにハケ調整が施されており、朝顔形埴輪の口縁部である可能性も残される。



第21図 平城坂上陵調査箇所の平面 (1/160)



第22図 平城坂上陵調査箇所の断面 (1/80)



第23図 平城坂上陵の出土品写真

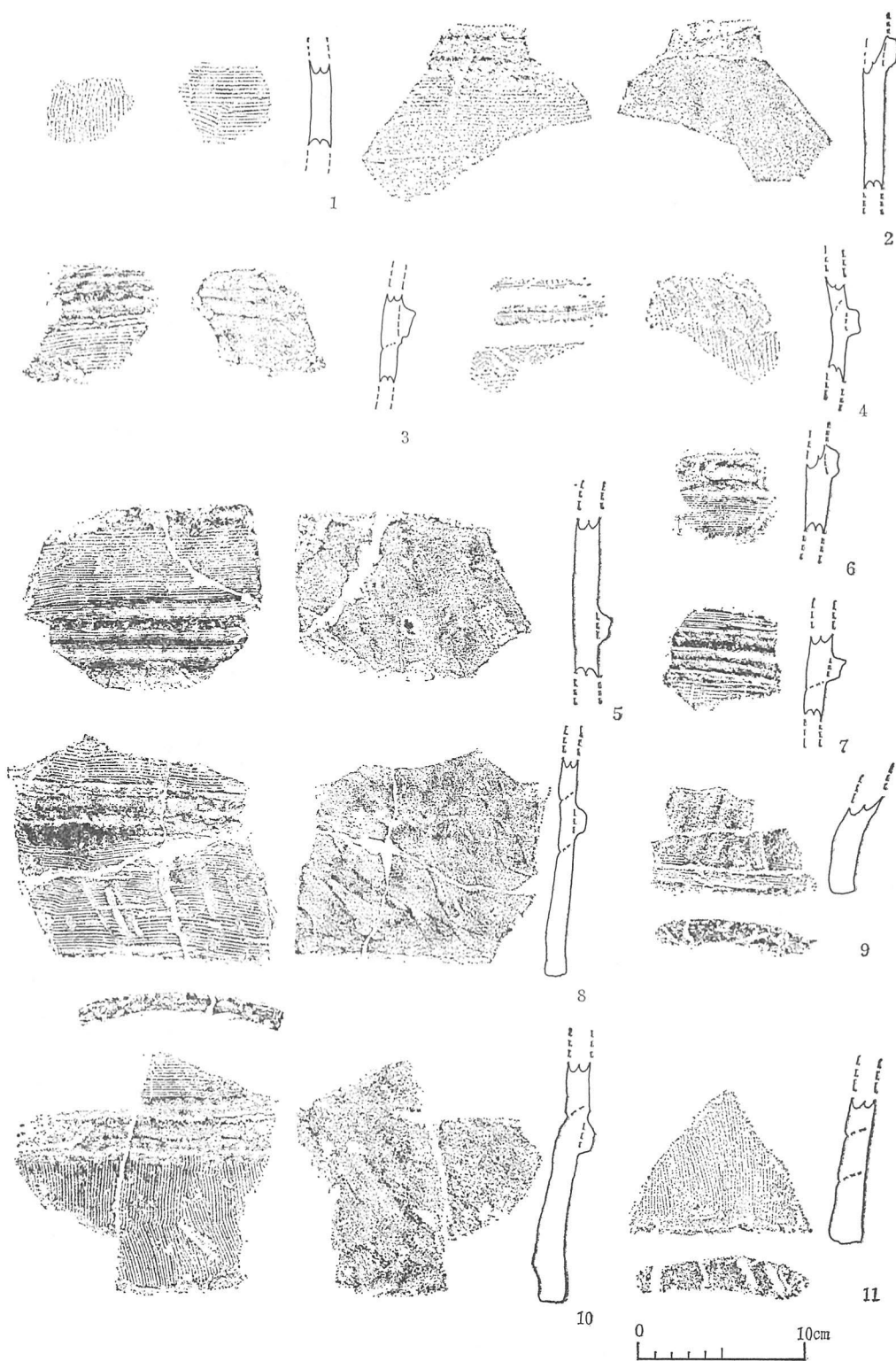
さて、今回出土した埴輪には底部が多く出土しており、底部について詳述する。底部の破片は三〇個体出土しているが、接合はしないものの同一個体である可能性もあるため、かならずしも三〇本の埴輪というわけではない。この底部（第一段）の調整には三種類があり、最下段までヨコハケ調整を施すもの三

突帯下端までの高さが測定できた個体は五個体であるがいずれも八・一〜八・六センチであり、第25図20に示した個体は少なくとも一七センチは突帯がなく形象埴輪の円筒部底部である可能性が高い。各個体の大きさについては直径を正確に測定できる個体はないものの、破片から復元すると二六〜二八センチ前後が多く、最大で三六センチを測るものがある。

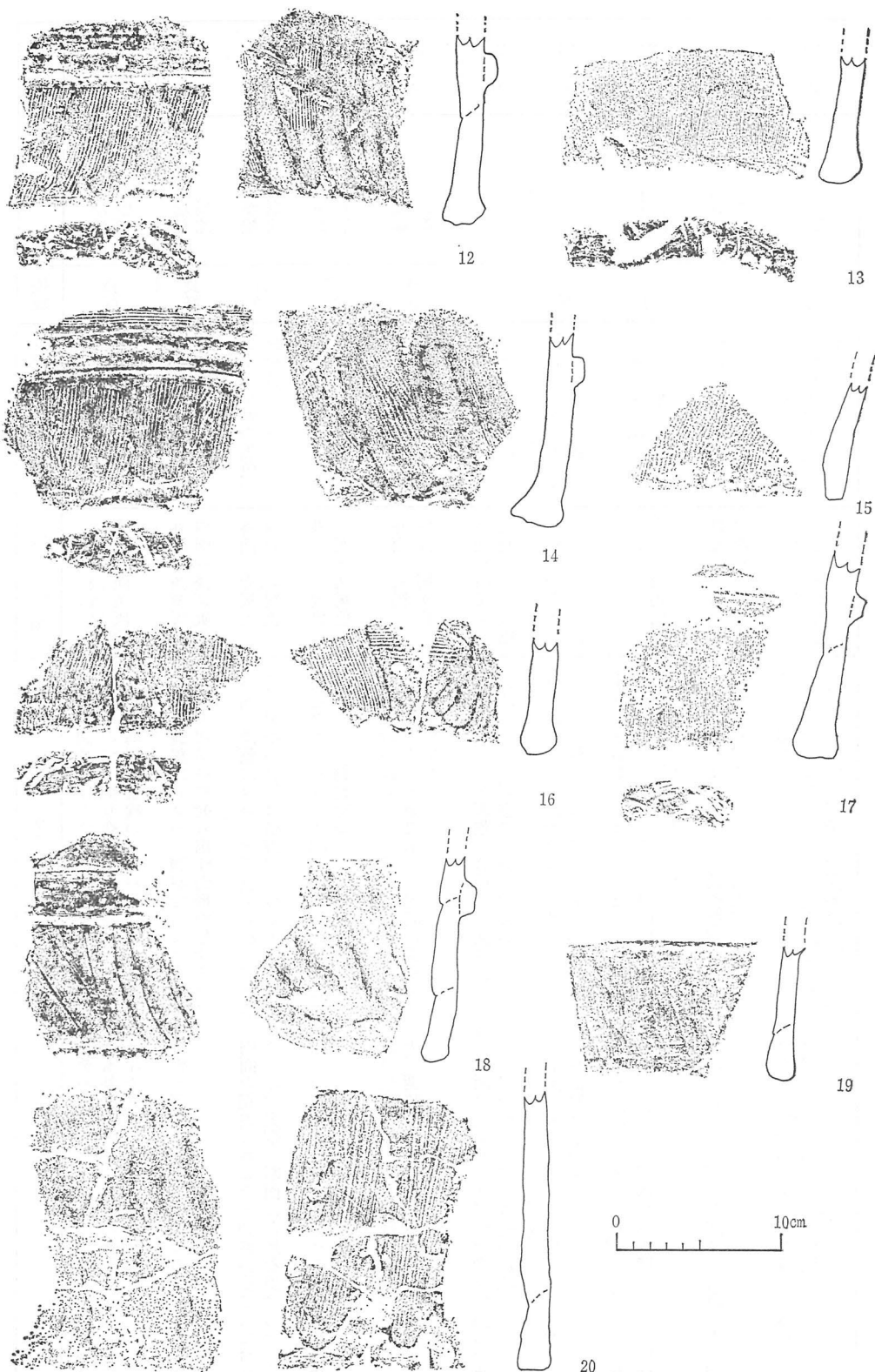
その他、埴輪の詳細については別表の観察表を参照されたい。

（徳田誠志）

点（第24図8・9）、縦ハケ調整のもの二点（第24・25図10〜17）、ナデ調整のもの二点（第25図18〜20）であり、不明のもの五点である。このうちタテハケ調整のものでは一センチあたり八〜九条の細かいものと、一センチあたり四〜五条のやや粗いものの二種類がある。三〇点という個体数で全体を推定するには無理もあるが、本陵に使用されている埴輪の第一段の調整にはタテハケ、ナデ調整の一次調整のみが施され、第二次調整であるヨコハケ調整が省略される傾向にあるといえる。また、ヨコハケ調整を施した個体は底面に棒状の圧痕が認められず、下端が肥厚するものも少なく、全体に丁寧な作りである。一方、タテハケ、ナデ調整のみで仕上げられた個体は底部が肥厚し、底面に棒状圧痕を明瞭に残す個体が多い。



第24図 平城坂上陵の出土品 (1) (1/4)



第25図 平城坂上陵の出土品 (2) (1/4)

挿図番号	器種	焼成	胎土	色調	調整等個体の特徴
24 10	円筒埴輪 底部	良好	緻密 0.1~0.2mmの黒色砂粒・石英・雲母を含む。	外面…淡黄灰色 内面…淡黄灰色	外面の調整はタテハケ調整であり、第2段目の調整はヨコハケ調整（B種）である。内面は左上りのナデ調整が施されており、下端は肥厚しない。底面の棒状圧痕は認められない。突帯の断面形は台形を呈する。
24 9	円筒埴輪 底部	良好	緻密 0.1~0.2mmの黒色砂粒を含む。	外面…淡黄灰色 内面…淡黄灰色	外面は下端までヨコハケ調整を施した後、最下端に若干ナデ調整を施す。内面はナデ調整であり、底面には棒状の圧痕を残す。
24 8	円筒埴輪 底部	良好	緻密 0.1~0.2mmの黒色砂粒を含む。	外面…明褐色 内面…明褐色	外面は下端まで1センチあたり5~6条のヨコハケ調整（B種）を施す。内面は斜め方向のユビナデ調整である。突帯は断面台形を呈する。他の底部に比べ器壁は薄く、底面には棒状の圧痕を残さない。
24 7	円筒埴輪 胴部	良好	緻密 0.1mmの石英・雲母を多量に含む。	外面…淡黄灰色 内面…淡黄灰色	外面は1センチあたり4~5条ほどのヨコハケ調整（B種）が施されている。内面はユビナデ調整である。突帯は上辺がややせり出す断面M字形を呈する。
24 6	円筒埴輪 胴部	良好	緻密 0.1mmの黒色砂粒を多量に含む。	外面…淡黄灰色 内面…淡黄灰色	外面はヨコハケ調整（B種）が施されている。内面は左上りのユビナデ調整である。突帯はヨコナデ調整のために中央がやや凹んでおり、断面はM字形に近い形状を呈す。
24 5	円筒埴輪 胴部	良好	緻密 0.1~0.2mmの石英を含む。	外面…明褐色 内面…明褐色	外面の調整はヨコハケ調整（B種）である。他の破片に比べハケメはやや細かく1センチあたり7~8条である。内面の調整はユビナデ調整が施されている。突帯の断面は台形を呈する。
24 4	円筒埴輪 胴部	良好	緻密 0.1~0.2mmの黒色砂粒を含む。	外面…明褐色 内面…明褐色	突帯の下にヨコハケ調整を施した後に櫛描波状文を施す。内面は左上りのハケ調整の後にユビナデ調整を施す。内外面ともハケメは1センチあたり4~5条ほどである。
24 3	円筒埴輪 胴部	良好	緻密 0.1mmの黒色砂粒を含む。	外面…赤褐色 内面…赤褐色	外面の調整はヨコハケ調整（B種）である。内面の調整はユビナデ調整が施されており、特に突帯の裏側は横方向のユビナデが施されている。突帯の断面は台形を呈する。
24 2	円筒埴輪 胴部	良好	緻密 0.1~0.2mmの黒色砂粒を含む。	外面…淡黄灰色 内面…淡黄灰色	外面の調整はヨコハケ調整である。内面はユビナデ調整によって仕上げられている。突帯は上辺がややせり出す台形を呈する。
24 1	円筒埴輪 胴部	良好	緻密 0.1~0.2mmの黒色砂粒を含む。	外面…淡黄灰色 内面…淡黄灰色	外面の調整にはタテハケの調整を施す。このタテハケ調整は1センチあたり4~5条ほどのもので、切り合っているものが多い。内面も外面と同様のヨコハケ調整が施されている。朝顔形埴輪のラッパ状に広がる部分の破片である可能性も残される。

挿入番号	器種	焼成	胎土	色調	調整等個体の特徴
25—20	形象埴輪 底部	良好	緻密 0.1～0.2mmの黒色砂粒・石英・雲母を多量に含む。	外面…赤褐色 内面…赤褐色	底面から17センチ以上突起が認められないことから通常の円筒埴輪底部ではなく、形象埴輪の円筒部底部と判断した。調整は内外面とも左上りのナデ調整であるが、他の個体に比べてやや雑な感じを受ける。底面に棒状の圧痕は認められない。
25—19	円筒埴輪 底部	良好	緻密 0.1～0.2mmの石英・雲母を含む。	外面…淡黄灰色 内面…淡黄灰色	外面の調整は左上りのナデ調整であり、裏面も同様のナデ調整が施されているが、粘土の接合痕を残している。下端部は肥厚しない。
25—18	円筒埴輪 底部	良好	緻密 0.1～0.2mmの石英・雲母を含む。	外面…明褐色 内面…明褐色	外面の第1段の調整は左上りのナデ調整が施され、第2段以上はヨコハケ調整が施されるものと思われる。内面の調整も斜め方向のユビナデ調整のみで、粘土の接合痕を明瞭に残す。下端部はユビオサエされているため肥厚せず、棒状の圧痕も認められない。
25—17	円筒埴輪 底部	良好	緻密 0.1～0.3mmの石英を含む。	外面…淡黄灰色 内面…淡黄灰色	外面には他の個体よりやや細かいタテハケ調整（1センチあたり9～10条）が施される。内面は左上りのナデ調整が施される。底面には棒状の圧痕を残す。
25—16	円筒埴輪 底部	良好	緻密 0.1～0.2mmの石英・雲母を含む。	外面…暗褐色 内面…暗褐色	外面はタテハケ調整が施される。内面はナデ調整の後、ヨコハケ、タテハケ調整を1単位施す。下端部は肥厚し、底面には棒状の圧痕を残す。
25—15	円筒埴輪 底部	良好	緻密 0.1～0.2mmの石英・雲母を含む。	外面…淡黄灰色 内面…淡黄灰色	外面にはタテハケ調整が施され、内面は左上りのナデ調整が施されている。内面の下端部にはユビオサエがなされているため肥厚せず、棒状の圧痕も認められない。
25—14	円筒埴輪 底部	良好	緻密 0.1～0.2mmの黒色砂粒・石英・雲母を含む。	外面…明褐色 内面…明褐色	外面の第1段の調整は1センチあたり4～5条のタテハケ調整であり、第2段目の調整にはヨコハケ調整が施される。内面はハケによる調整も認められるが基本的には左上りのナデ調整である。突起の断面は台形を呈する。下端は肥厚し底面に棒状圧痕を残す。
25—13	円筒埴輪 底部	良好	緻密 0.1～0.2mmの黒色砂粒を含む。	外面…淡黄灰色 内面…淡黄灰色	外面の調整は他の個体よりやや細かいタテハケ調整（1センチあたり7～8条）が施される。内面は左上りのナデ調整が施される。下端は肥厚し、底面に棒状の圧痕を残す。
25—12	円筒埴輪 底部	良好	緻密 0.1～0.2mmの石英・雲母を含む。	外面…明褐色 内面…明褐色	外面の調整は1センチあたり5～6条ほどのタテハケ調整が施されている。内面の調整はタテハケ調整を1単位のみ施した後、縦、斜め方向のユビナデ調整が施されている。突起の断面形は台形を呈し、下端は肥厚する。底面には棒状の圧痕を残す。
24—11	円筒埴輪 底部	良好	緻密 0.1～0.2mmの石英を含む。	外面…淡黄灰色 内面…淡黄灰色	外面の調整は他の個体よりやや細かいタテハケ調整が施されている。内面はナデ調整であり、底面には棒状の圧痕を明瞭に残す。